

毎年9月9日は「救急の日」。この日から1週間は「救急医療週間」とされています。新型コロナウイルス感染拡大に伴い、救急出動要請は増加。救急医療現場は逼迫していると言われ、熊本県も例外ではありません。限りある医療資源を守るためには、県民ひとりひとりの協力が欠かせません。熊本県の救急医療体制の現状と、救急医療を守るために私たちができることについて、熊本大学病院救急部教授の入江弘基先生に話を聞きました。

## 県域をカバーする熊本型救急医療体制

### 救急医療には3段階 症状と緊急性で分類

救急医療には、一次・二次・三次救急があると聞きます。それぞれの医療が果たす役割について教えてください。

入江 救急指定病院は、症状と緊急性により一次救急から三次救急までの3段階に分けられます。一次救急は、入院や手術までは必要がなく、比較的軽度の処置で済む医療を提供します。救急搬送のうち、約半数はこのケースです。二次救急は手術を含めた入院治療に

24時間体制で対応するもので、多くの救急医療機関でも受け持つことができます。三次救急では、より集約的・専門的な知識を有する治療が必要とされます。脳卒中、心筋梗塞、大動脈解離など命に関わる重症の患者さんに対応し、緊急血管内治療や緊急手術の後、集

中治療室などでの治療が求められるケースがあります。

### 熊本独自の体制 各機関連携し広域搬送

熊本県の救急医療体制の中でも三次救急を担う病院、またその役割について教えてください。

入江 熊本県において三次救急を担うのは、救急救命センターを有する「国立病院機構熊本医療センター」「熊本赤十字病院」「済生会熊本病院」に加え、高度な医療を提供する特定機能病院としての役割を持つ「熊本大学病院」を加えた4つの医療機関です。いずれも熊本市内に集中しているため、各地域の基幹病院とも相

互に連携しながら県内全域の三次救急医療をカバーしています。熊本市以外の患者さんの場合は、昼間であれば地域の基幹病院から三次医療機関への熊本県防災ヘリによる広域搬送を利用することもありますが、現場に救急隊が到着するまで時間がかかるようなケースや一刻を争うような疾患の場合は、ドクターヘリで医師が現場で確認した後、地域の病院が救命センターに搬送することで広域の救急医療を円滑にカバーする熊本独自の体制がとられています。

— その他、熊本県独自の救急医療体制の取り組みはありますか。

入江 大学病院が熊本県や医師会と密接に連携を取っています。大学病院の複数の医師が医療の調整役として参画しています。新型コロナウイルスの感染拡大が発生した1年目は、熊本大学病院では重症患者さんだけ受け入れていましたが、新型コロナウイルス感染の状況の変化に伴い、1フロアを中等症病床に転換し、他の救命センターにも病床を増やしていただきました。このようなスムーズな連携が、新型コロナウイルスの状況に応じた病床の確保につながっています。

## 熊本大学救急部部長／教授 入江弘基先生に聞く

# 熊本県の救急医療は今

### 1人でも多くの救える命を救うために

## 新型コロナウイルスの感染拡大に伴う救急医療の現状

### 第7波や熱中症 増加する救急搬送要請

— 新型コロナウイルスの感染拡大による救急医療の状況や貴学における取り組みについて教えてください。

入江 毎年夏になると熱中症による救急出動要請が増えるのですが、今年は新型コロナウイルスの感染拡大により、熱中症にかかっている人と新型コロナウイルスに感染している人の区別がつかない状態での発熱者の救急要請が急増しました。通常なら熱中症の患者さんはこの救急医療機関でも受け入れ

られていたのですが、コロナ対応により受け入れる人数は制限されてしまいます。もともと患者さんが多い上に、第7波の広がりによりさらに救急搬送の要請数は増え、救急車の到着後も搬送先がすぐに決まらない搬送困難事例も多く報告されています。医療現場においても、家庭内で感染あるいは濃厚接触となり欠勤を余儀なくされるスタッフが増えるなど、なんとか救急医療現場をやりくりしている状態です。

医療機関は限られます。熊本市民病院は、周産期医療を担うと同時に新型コロナウイルスの患者さんを受け入れていますが、市民病院に入れない新型コロナウイルスの妊婦さんも大学病院で受け入れていきます。また、新型コロナウイルス感染により熱性けいれんを発症したお子さんの受け入れも増えています。

入江 決して「救急車を呼ばないでください」とは言いませんが、新型コロナウイルス感染症の症状を理解し、自分なりの事前準備をしておきたいと思えます。なかには1人で隔離療養している時に40℃近い高熱が出て、不安感が強くなって救急搬送される方が少なくありませんが、点滴をしてゆっくり話をお聞きすると、落ち着くケースがほとんどです。現状では、10代、20代の若い方で基礎疾患のない方は、新型コロナウイルスで命を落とすことはありません。陽性になり「熱が上がりそう」「水分が取れそうにない」と思ったら、「水分や食料、解熱剤などを準備しておく」「エアコンで温度管理をしながら過「こす」「発熱して不安感が強くなった時のために相談



熊本大学病院救急部部長／教授 入江 弘基氏

いりえ・ひろき 熊本大学医学部を卒業後、整形外科となり、熊本大学病院集中治療部、救急総合診療部などを経て令和3年3月から現職。

- ・日本救急医学会認定専門医
- ・日本DMAT 隊員（統括）
- ・熊本県メディカルコントロール協議会会長
- ・熊本県災害医療コーディネーター

できる人を探しておく」「玄関先まで医薬品や食料などを届けてくれる人にコンタクトができるようにしておく」などの準備をしておくだけでも、救急搬送は減ると思います。

### 救急医療体制を守る 感染予防で協力を

— 最後にメッセージをお願いします。

入江 新型コロナウイルス感染拡大による救急医療の崩壊を防ぐには、県民のみならず皆さんの感染予防対策が第一です。行動制限をしないということが、「コロナにかかってもいい」ということではありません。手指消毒

や三密の回避など、新型コロナウイルスの基本的なことは続けていただきたいと思えます。新型コロナウイルスに一度罹患すると免疫力は上がりますが、再感染しないとは限りません。ワクチンを打つことで抗体価が上がり、ワクチン接種ができるタイミングになったら、打つべき人には打っていただくことで、集団としての感染の予防効果が現れます。熊本県の救急医療体制を守り、本当に救急医療が必要な方の命を救うためにも、みなさんのご協力をよろしくお願いいたします。

## 9月9日は「救急の日」



順不同